

山西省のことを話しますと、どうしても黄河のことを語りたくなります。そして黄河について語ればどうしても黄河の魂ともいわれる「壺口瀑布」のことを話したくなるのです。

人民元の50元の紙幣の裏には、「壺口瀑布」の写真があります。黄河は青海省を源として流れ出て、四川省で北に方向を変え、甘肅省、寧夏回族自治区を抜け出します。ここまでの黄河は、悠々と広がり、穏やかでした。しかし、内モンゴル自治区に入り、オールドスの大地で陰山脈にぶつかって東へ曲がらなければならず、そうして曲がってから間もなくまた呂梁山に阻まれることとなります。黄河は気性が荒くなり、南へ90度曲がると一気に黄土高原にある陝西省と山西省の間で「陝晋峡谷」を切り開き、黄土高原の黄色い土砂を巻き込んで滔滔と南下して行きます。



黄河はこの「陝晋峡谷」を通り抜けて初めて正真正銘な「黄河」に成るのです。

黄河は北から南へと、725 kmほど晋陝峡谷を流れ下るとパッと開けた平地にでます。ここが「龍門」というところです。龍門は登竜門の故事で知られる場所です。龍門から更に壺口瀑布までの60 kmの間は晋陝峡谷でも最も険しい谷です。幅数百メートルの黄河の流れは「壺口瀑布」に来て、急に幅50メートルぐらいまで絞られ、そして落差30メートルの深い滝壺に勢いよく注ぎ込み、まるで巨大な急須（中国語で茶壺）の注ぎ口から水が注ぎ込むようです。黄河の「壺口」に立てば、黄色い飛沫が天を蔽い、水の轟音が耳を震わせ、まるで天から滔滔と降り注いでくるような黄色い流れの迫力に誰でも言葉が失ってしまうでしょう。

「黄河の魂は、ここにある！」と「壺口瀑布」を見た人々はそう言います。

黄河が水上交通でにぎわっていた昔、「壺口瀑布」は唯一の難所でした。船がここへ着くと、人々や、荷物は総て必ず船から降ろされ、船底の下に丸太を敷いて

船を陸に引き上げ、大勢の人夫や牛馬で下流まで引っ張り、「壺口」を通り過ぎてから再び舟に乗り旅を続けたといわれます。

「壺口」の下流、3000メートルのところに、「孟門山」と言う長さ300メートルの小さな島が河の真ん中にあります。北魏の地理学家である酈道元が《水経注》に述べたことによると当時、「壺口瀑布」と「孟門山」は繋がっていたのですが、唐代の古籍《元和郡県志》では、「壺口」は「孟門山」の北から「千歩離れる」と述べられています。つまり、「壺口」と「孟門山」は約1500mの距離が生じたこととなります。現在は、「壺口」と「孟門山」は3000mも隔たっています。北魏から今日までの1600年の間に、「壺口瀑布」は上流の方へ3000mも移動したということです。

それはなぜでしょうか？「水滴石穿」（水滴は石を穿る）という話があります。滔滔たる黄河の流れは壺口から幅30mの谷に流れ落ち、まるで傲慢な黄色い龍が石壁に阻まれて、何千年も荒れ狂い、片方は石、片方は水、両者が力比べを続けた結果、岩石がどんどん砕かれ、滝壺は少しずつ上流の方へ移って来たのです。

しかし、専門家の調査では、「壺口瀑布」は今でも毎年3、4ミリの距離で上流の方へ移動しているのですが、80年代以来、「壺口瀑布」の雄大さが衰えて来ている傾向が見えます。原因は水の流量が少なくなり、土砂の量が増加した結果、水の流れる力が弱くなって、流れの広さと落差が徐々に小さくなって来ているのです。このままで行きますと、百年後の子孫は「黄河の魂である」壺口瀑布の現在の雄大さを見られなくなる恐れがあります。

ですから、壺口瀑布の景観を何時までも存在させるために、確実に黄河上流の土砂を保ち、黄河の断流を防ぐことは黄河流域の人々の課題になっています。